

国語 第2学年 主語と述語に 気をつけよう

検討会の想定問答

指摘 1：この単元で身に付けることは何か。

返し：文の中で「だれが・何が」と「どうする・どんなだ」が対応することを確認、伝わる文に直す。用語の暗記より、文を読んだ相手が同じ場面を想像できることを重視する。B(1)エの学習として、主語と述語を結んだ文と、対応を直した自分の短い文章。

指摘 2：何をもって学習できたと判断するか。

返し：おおむね満足できる状況は、文章を読み返し、主語と述語の対応や語の続き方確かめているという姿で捉える。語句や本文を示さず結論だけ述べる場合は、根拠を確かめる支援を行う。発言の回数や記述の長さでは判定しない。B(1)エの姿を本時の発言と記録に照らす。

指摘 3：活動が楽しいだけで終わらないか。

返し：主語と述語を結んだ文と、対応を直した自分の短い文章を残す。活動後に、どの言葉を根拠にしたかを確認することで、B(1)エに関わる学習の中身を確認する。

指摘 4：つまり児童にはどんな支援をするか。

返し：主語と述語を遠くに離して別の人の行動につなぐ、述語を省いたまま文末にする。これに対して、独自例「ねこがはしる」と「ねこはしろい」を使い、主語と述語を線で結ぶ。自分の文からまず「どうした」を探し、その動作をしたものを確認する。〔知識及び技能〕(1)カとB(1)エを切り離さず扱う。

指摘 5：考えが違ったときはどう扱うか。

返し：教師の結論を選ばせず、「だれが、どうした文なのか、言葉を結ぶと合っていますか」に戻す。言葉や本文で確かめられる点と、個人の感じ方を分け、B(1)エに関わる根拠を話し合う。

指摘 6：本時の評価で態度まで決められるか。

返し：本時の参加の様子だけでは決めない。学年の目標(3)を受け、単元を通した記録と見直しの理由を合わせて判断する。発言の多さや従順さを態度の評価にしない。

指摘 7：端末がない学級でもできるか。

返し：主語と述語を結んだ文と、対応を直した自分の短い文章は紙に記録できる。端末があれば書き直し前後を保存して比較する。道具の操作をB(1)エの評価の代わりにしない。

指摘 8：時間が足りないとき、どこを残すか。

返し：総時数の出典は光村図書出版の年間指導計画である。活動量を調整する場合も、本時の問いを自分で考える場面と、根拠を比べて記録を見直す場面は残す。B(1)エで目指す姿が確認できるように配当を組み直す。

指摘 9：この教材で、練習と使えるようになった姿をどう分けるか。

返し：独自例「ねこがはしる」と「ねこはしろい」を使い、主語と述語を線で結ぶ。自分の文からまず「どうした」を探し、その動作をしたものを確認する。完成品だけでなく、主語と述語を結んだ文と、対応を直した自分の短い文章。を見て、確かめ方と変えた理由を判断する。

指摘 10：振り返りを感想だけにしないためには。

返し：「だれが、どうした文なのか、言葉を結ぶと合っていますか」への答えを学習前後で読み比べる。変えた点に加え、理由を確かめて残した点も書く。B(1)エに関わる言葉の捉え方・使い方を記録する。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」(@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

